

ウクライナ危機

緊急人道支援事業（寄附金対応）

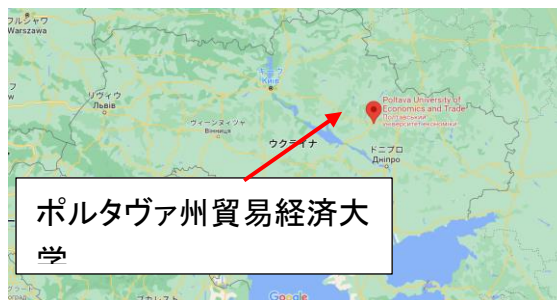
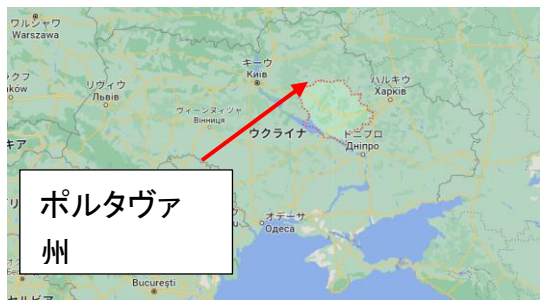
報告書



シャンティ国際ボランティア会
Shanti Volunteer Assoc.

II 活動地の概況

【ポーランド・ウクライナでの活動地】



ウクライナのポルタヴァ州と物資配布を行っているポルタヴァ州貿易経済大学



ポーランド事務所のあるワルシャワと新たに活動を開始するドルヌィ・シロンスク県のルバフカ町

2022年2月24日に始まったロシアによるウクライナへの軍事侵攻によって、ポーランドをはじめとする周辺国に、多くのウクライナ人が避難しました。国連難民高等弁務官事務所(以下 UNHCR)によりますと、800万人以上が近隣国に避難し、500万人以上がウクライナ国内で避難生活をしています。侵攻が始まってから、すでに1年以上が経過しましたが、

都市部へのミサイル攻撃、ドローンによる攻撃が続いており、首都キーウでは、毎日のように空襲のアラームが出されています。東部地域での戦闘も激化し、いまだ終わりの見えない状況が続いています。

ウクライナの隣国であるポーランドは、地理的、文化的な近さからウクライナ避難民の最大の受け入れ国となっており、約 150 万人の避難者を受け入れています。侵攻直後から、国連や政府による支援のみならず、市民による自発的な支援活動も行われ、宿泊施設や部屋の提供、食糧をはじめとする支援物資の提供が積極的に行われてきました。

しかし、侵攻の長期化によって、避難生活も長期化しています。こうしたことから多くの自治体で、受け入れキャパシティの超過が見受けられるようになってきました。また、都市部は物価も高く、住居を確保することも難しいため、ポーランド国内のウクライナ避難民は徐々に中心部から離れた地域に点在して生活をするようになりました。これによって、支援が届きにくい状況にある人も増えてきました。

そうした地方へ分散や言語の違いによる影響で地域社会とつながることが限られること、そして先行きが不透明な避難生活の長期化によって、避難民の精神的な健康にも懸念が高まってきています。子どもたちは、ポーランドの現地の学校とウクライナの学校の授業をオンラインで組み合わせることで、学習の機会を作り、つながりを作ることができるようになりつつあります。しかし、母親や高齢者などは、言語習得や就業が難しく、シェルターで一日の大半を過ごすことがあります。

ウクライナ国内の避難民においても上記のような問題が発生しています。活動地域であるポルタヴァ州は、比較的戦況が安定していることから、多くの避難民が集まってきています。そこでは、生活の再建などのニーズも出てきています。しかし、ロシア語を母語とするウクライナ人も存在し、言語が壁となり、地域とつながりを持つことが難しい状況にあります。

ウクライナ国内、ポーランド国内のいずれにおいても、避難民の人たちは長期化する避難生活で、言語の問題、就労の問題、地域社会とつながることの難しさなど多くの問題に直面しています。加えて、ホストコミュニティも十分な受け入れ体制を有していないため、こうした問題に対処することができないでいます。

【モルドバでの活動地】



ウクライナと国境を接するモルドバにも、ポーランド同様、多くのウクライナ避難民が流入しました。UNHCRによると、2023年8月の時点で10万人を超える避難民がモルドバに登録され、ウクライナからモルドバの国境を越えた人は約90万人に及びます。

モルドバは九州ほどの国土に、約260万人が暮らし、もともと、ヨーロッパの中でも最貧国と考えられる国でした。決して経済的に豊かなわけではない国に、これほどの規模の避難民の流入したことによって生じる経済負担は、非常に大きなものになっています。

ポーランドと同じように、紛争の長期化によって、ウクライナ避難民のおかれた状況やニーズも変化していきました。避難してきた人たちも、徐々にモルドバの各地で避難生活をするようになっていきます。避難をしてきた子どもたちは、オンラインでウクライナの公教育にアクセスをしながらも、現地での生活をしていくことも念頭に置いて、現地の学校に通うなど、徐々に生活の仕方にも変化が生じてきています。

Ⅲ これまでの活動内容

◎ポーランドにおける活動

「GOOD START プロジェクト」

～ポーランドにおけるウクライナ危機から逃れた子どもたちのグループセラピー及び現地の子どもたちとの交流事業～

1. 事業概要

戦争が長期化することに伴い、避難生活も長期化しています。避難をしてきた子どもたちは大きなトラウマを抱えるとともに、先行きが不透明な避難生活にストレスを抱えています。現地で自閉症の子どもたちの支援活動を行う Autica（アウティカ）と連携し、こうした子どもたちにアートを通じたグループセラピーを実施しました。セラピーは、一時的にトラウマやストレスを軽減し、様々な環境で新たなことに専念したり、自己決定をしたりできる精神状態を取り戻すことを目的にしています。

2. 事業対象地

ポーランド共和国 ドルヌイ・シロンスク県カミエナ・ゴーラ郡、クルチェスカウエ

3. 事業実施期間

2022年12月15日～2023年6月14日

4. 受益者

主に、ウクライナからの難民の子ども36名（幼児から18歳）

毎回様々な子どもが参加し、難民の子どもや第三国への移住を考えている家庭の子どもなど背景やおかれた状況も多様です。加えて、現地の子どもも参加できるようにしているため、ポーランド人の子どもも参加しました。

5. 実施方法

実施期間中に、カミエナ・ゴーラとカルパツにおいて、月に2回ずつ実施。毎回2名のセラピストを派遣し、2グループに分かれてアートセラピーを実施しました。また、ポーランド人の学生ボランティアも参加し、活動をサポートしました。

6. セラピスト

マーチン・マカシュ氏

グラフィック・アート学部（現アカデミー・オブ・アート&インテリアデザイン）卒業。グダニスクの自閉症者支援協会で作業療法士として2年間勤務。

2008年以降、作業療法士のためのコースや専門的なワークショップ、実地研修のワークショップを多数実施。アートセラピーのクラスの実施し、手芸の先生でもある。特別な教育を必要とする子どもたちや才能ある子どもたちのための私立学校「クリエイティブ・スクール」の創設者。社会活動家、ボランティア。



ミロスラフ・クツラ氏

ヴロツワフ美術アカデミーの陶芸・ガラス科卒。美術・工芸を通じた子どもや若者の教育推進に尽力。イエレニャ・グラ文化センターで行われた多くの芸術的プロジェクト主催者であり、発起人でもある。ユニークで芸術的な陶芸の分野で、実用的かつ理論的なクラスを開催。ろくろ、釉薬、エンゴーズ、陶磁器絵の具などの装飾技法を用い、電気窯での焼成、薪窯・ガス窯等、日本式 RAKU 技法を実践している。



7. 実施結果・成果

セラピストによれば、この活動に参加したことを通じて、自己表現が豊かになった子どもが増えているように感じるとのことでした。子どもたちもアートを楽しみに来ている子どもが多く、活動を通して、情緒的な安定自己認識の向上につながってきたとのことでした。

時には、家族の突然のウクライナへの帰国、住まいの引っ越しや家族・親族の逝去などもありました。子どもたちがこの活動に熱中し自分の時間を過ごすことの重要性を保護者が理解しており、子どもたちの活動への参加については、肯定的であり非常に喜んでいと伺いました。また、時には、子どもたちの通う学校の心理カウンセラーとも連携して、子どもの支援を行うこともありました。

8. 提携団体 Autica（アウティカ）の代表エイシャ氏より

この活動を通して、ウクライナの難民の子どもたち同士のコミュニケーション、そして、彼らと地元ホストコミュニティとのコミュニケーションの機会が促進されました。それにより、心に傷を負っている子どものストレスの軽減となりました。また、自己肯定感が向上

し、自分で考えて決定できるようになりました。例えば、成人に近いある子どもは、精神的な落ち着きを取り戻し、積極的にシェルターから外出しアルバイトをするなど、自立に向けて積極的に動き出しています。課題としては、参加者の子どもたちの年齢層が4～19歳と幅が広がったので、その調整に労力をかけました。この活動以外でも、ウクライナの子どもたちがホストコミュニティと地域でつながり、中長期的な社会統合にも向けての大きな一歩となりました。

最後になりますが、ウクライナから来た子どもたちにとって、日本の団体と接する機会はほとんどなく、非常に良い機会となりました。国際色が豊かで魅力的に見えているようです。今後ともシャンティとの交流事業が継続する機会があれば、大変うれしく思います。

9. 参加者の声

Aさん（女子14歳）

ポーランドに来てもう少しで1年が経ちます。今はだいぶここでの生活に慣れましたが、最初は言語の違いから感じる難しさも多くありました。ポーランドの学校に行きながらオンラインで受けられるウクライナ国内の授業にも参加しています。時間があるときには、犬を散歩させたり、友達と過ごしたりしていますが、この教室に参加するのも今では私の楽しみの一つになっています。ウクライナにいるときは、今ほど絵をかいたり工作をしたりすることがありませんでしたが、友人たちと一緒に参加できる製作活動を楽しんでいます。参加する子どもの中にはまだポーランド語に馴染みのない友人もいるので、お互いに助け合いながら参加できると良いなと思っています。

B君（男子11歳）

ウクライナのドニプロから家族と一緒にポーランドに避難してもう少しで1年が過ぎます。最初はポーランドとウクライナの文化の違いや言語の違いに戸惑うことも多くありましたが、今はだいぶ慣れてきました。学校ではポーランド語も勉強しており、少しずつ言葉もわかるようになりました。今住んでいるポーランドのカミエナ・ゴラ郡は、以前、ウクライナ国内で住んでいた小さな都市に似ており、とても気に入っています。以前は空手を習っておりウクライナ国内では何度も賞を取ってきました。様々な創作活動が体験できるアート教室をとっても気に入っています。何度か教室（セラピー）にも参加しましたが、ドラムを使った回が印象に残っています。お母さんからは、まだしばらくカミエナ・ゴラ郡にいと聞いているので、またこの教室での活動に参加したいと思います。



ゲームで息抜きをする子ども



創作に取り組む様子



完成した絵をセラピストと一緒に披露する子ども



参加者で記念写真



セラピストと創作に取り組む様子

◎モルドバにおける活動

「モルドバにおけるウクライナ危機から逃れた子どもたち学用品およびスポーツ用品配布事業」

1. 事業概要

戦争の長期化に伴い、現地の学校へ通うことや現地コミュニティへの参加に対するニーズが高まっています。そうしたニーズに対応するために、避難民の子どもを対象として学用品とスポーツ用品の配布を行いました。物資配布を行うにあたり、モルドバの現地 NGO である、Charity Center for Refugee(CCR:難民慈善センター)と連携して、配布を行いました。物資配布を通して、学びの環境を整備することを目標としました。物資配布の対象は、公平性の観点からウクライナの子どもに限定することはず、対象地域や対象校に通うモルドバの子どもたちも支援の対象としました。

上記の物資配布に加えて、対象の幼稚園や学校と協力をして、スポーツイベントも企画しました。こうしたイベントを開催することを通して、ウクライナ避難民が地域と交流するきっかけを作り、現地コミュニティとの共生を促進することを目指しました。

2. 事業対象地

CCR を通して、以下の地域にある幼稚園、学校に物資を配布しました。

- ・モルドバ中部：キシノウ市、メレニ村、ラゼニ村、ブデシュティ村、バルツァタ村、フルボバツ村、アネイニ・イノ町
- ・モルドバ北部：エジネツ町
- ・モルドバ東部：トランスニストリア地域、チラスポリ町
- ・モルドバ南東部：カウシェニ町、シュテファン・ボダ町

3. 事業実施期間

2023年3月15日～2023年6月30日

4. 受益者

配布対象地域にある、インフォーマルの教育施設を含めた19の施設で配布しました。対象校は、難民の数のみならず、脆弱性にも配慮して選定を行いました。

支援物資を受け取った子どもの数：11,012人

5. 活動結果

モルドバで高まる学用品とスポーツ用品に対するニーズを満たすために、以下の学用品キットとスポーツ用品セットを配布いたしました。

配布物資一覧

学用品	スポーツ用品
ペン	ロープ
修正ペン	卓球ラケット 2 本+ボール 3 個
画用紙 A4	フラフープセット
ノート A4	体操スティック
穴あけパンチ	子ども用フィットネスロープ
プラスチックフィルム	バレーボール
カバーフィルム	サッカーボール 5 号
厚紙	サッカーボール 4 号
スパイラル	バスケットボール
カラーペーパー80 g A4(5 色セット)	ボウリングセット(ピン 10 個付き)+ボール 2 個
カラーペーパー160 g A4(5 色セット)	ストップウォッチ
クリアファイル A4	ホイッスル
フリップチャート	バレーボールネット(白)
ホワイトボードマーカー	バレーボールネット(黒)
修正テープ	リング投げゲーム
	体操ボール
	空気入れ
	バトミントンセット

6. 写真報告





支援物資と対象校と CCR のスタッフ



サッカーボールで遊ぶ子どもたち



スポーツイベントでの、綱引きの様子



スポーツイベントで、元気に走り回る子どもたち

IV 公的資金による活動

弊会では、外務省資金を活用して、食糧・生活物資の配布事業、成人教育事業を展開してきました。以下の事業実施において、一部ご寄付を活用いたしました。

〈ウクライナ人道危機の影響を受けた被災者を対象とした食糧・生活必需品の配布および教育支援事業〉

食糧・生活物資の配布に関して、ウクライナ・ポーランドの避難施設に滞在する約2,400人に物資を配布しました。また、ウクライナから避難してきた子どもたち約700人に対して、タブレット端末などの教育物資も配布しました。ウクライナでは、情勢が不安定なため学校にて対面で授業を行うことが難しい状況にあります。加えて、ポーランドに避難している子どもも少なくありません。対面で授業を受けることは難しいですが、オンラインではウクライナのカリキュラムに基づく教育にアクセスすることができます。そこでタブレット端末を配布し、ウクライナの教育にアクセスすることができる環境を整備しました。

〈ウクライナ国内の避難民に対する生活再建支援および食糧・生活必需品配布事業〉

避難生活が長期化する中で、支援のニーズも変化してきました。長期化に伴い、避難先での生活再建といったニーズも出てきました。そこで、ウクライナのポルタヴァ州で成人教育事業を展開している「Adult Education Center(以後AEC)」の協力のもと成人教育事業を行いました。ポルタヴァ州にあるポルタヴァ経済貿易大学の寮とその周辺にいる避難民を対象に支援物資の配布も行いました。この事業では主にAECが大学の教室を利用してグラフィックデザインなど、就職につながるスキルを身に着ける成人教育講座を行いました。講座の中には、ストレスマネジメントなどをテーマにしたものもあり、自身のストレスや不安に向き合う方法を身に着けるとともに、対面で行われる授業は、一つの居場所になったともいうことができます。

〈カミエナ・ゴラ郡における社会統合促進事業〉

今年の、3月からはポーランド南西部チェコ国境近くのドルノ・シロンスキエ県のルバフカ町で新たな事業を開始しました。侵攻直後は、都市部に避難者は集中していましたが、徐々に生活費のかからない地方部に避難民が移動していくようになりました。しかし、地方の自治体は、たくさんの避難民を受け入れるキャパシティを有していませんでした。そこで、こうした問題を抱える自治体の一つであるルバフカ町と協力して、社会統合センターの建設に取り組むことになりました。今後、ルバフカ町と協力をしながら、ウクライナ避難民だけでなく、現地の人にとっても利用しやすい施設の設立に取り組んでまいります。

V 会計報告

【収入】

寄付金：21,133,538 円（398 件）

【支出】

項目		金額（円）
現地事業費	「GOOD START プロジェクト」	4,958,742
	「モルドバにおけるウクライナ危機から逃れた子どもたち学用品およびスポーツ用品配布事業」	5,044,300
	食糧・生活物資の配布事業、成人教育事業 （公的資金分を除く）	3,014,111
事業管理費		3,254,288
費用総額		16,271,441
残金(寄附金－費用総額)		4,862,097

残金につきましては、継続している事業に充当させていただきます。